追悼 ヨハネ中道政昭 司祭

平和の探求者

主教 オーガスチン 小林尚明

敬愛するヨハネ中道政昭司祭は、1月4日（水）早朝、神様の元に召されていかれました。96年のご生涯でした。葬送・告別式を7日（土）大聖堂で行い、先生の魂の平安とご遺族への神様からの慰めをお祈りいたしました。

２００２年、先生は76才で神戸松蔭女子学院大学を退職されます。その年の6月号神のおとずれに、「柔和な人々は地を受け継ぐ」とのタイトルで巻頭言を寄せられています。当時、インドとパキスタンの対抗的な原爆実験を創世記11章の「バベルの塔」の物語に譬えておられます。そして、「バベルの塔の物語の結末は混乱と分裂です。これは現代のバベルの塔においても同じでしょう」と今の世界のことを預言されているようにも感じます。

そして、先生が私たちに望まれることを旧約聖書列王記上3章のソロモン王の物語からされています。『王位についたソロモン王が夢の中で、神に向かって、長寿も富も敵の命も求めることなく、ただ民の訴えを正しく聞き分ける知恵を求めた、というお話がありますが、現代世界では、王や政治家たちではなく、私たち一人一人が、世の中の流れのままにいきるのではなく、未来への予測も含めて「物事を正しく判断できるように」神に祈らなければならない時代です』と書いておられました。

先生は、１９４５年立教理科専門学校生として、東京三鷹の中島飛行機武蔵製作所に学徒動員されておられました。「米軍の本土爆撃が本格化し、2月17日、18日と米軍戦闘機に爆撃をこの工場も受ける。私は他の学生たちと共に、四階の建物の地下に避難していたが、爆弾は私たちの殆ど真上の屋上で爆発した。…爆弾は三階を貫通し二階の床を大破してそこで止まった。この時に立教の同学年の学生が一人亡くなった」と先生の著書「平和への祈り　日米十六人の戦争体験記（聖公会出版）」に書かれていました。簡単に書いてありますが、この体験が後になって先生の平和への探求へと向かわせたのではないかと思います。私たち自身が「物事を正しく判断できるような」知恵を神様に求め、平和についてしっかり考えよ、と先生からのメッセージだと思います。

神への誠実に生きる

司祭 クレメント 信岡章人

『君の理想は何か』と先輩聖職から尋ねられ、戸惑いを感じたことがあります。例えば、『中道政昭司祭のような学者か、與賀田千秋司祭のような修道者か』と言われ、到底そんな高度な資質を望めない自分を知らされた思い出があります。東京大学でインド哲学を学び卒業、神学院を経て徳山の牧師を勤めていらっしゃいましたが、強烈に印象に残る人柄ではなかったようでした。しかし、ものを書く働きになると誰にも真似できない、インパクトの強い作品を発表、教区の霊性に驚異的な貢献を見せる方でした。その一例は、『神のおとずれ』の品質改良です。マンネリ化された機関紙、普通の説教や活動報告でなく、地方教会の現状をそのまま見せる迫力をもたらし、自ら地方教会に出向き、積極的な取材活動を展開しました。いわば命の通った教区報で信仰活動を取り上げ、教区の聖職、信者の魂の高揚に寄与された働きは忘れることが出来ません。

徳山聖公会、新居浜聖三一教会に勤務、カナダに留学、帰国後は聖公会神学院で教鞭をとり、当時、神戸教区から神学院で勉強中の「古本純一郎君」が指導を受けた話を聞きました。やがて、神戸松蔭女子学院大学の教授として招かれ、学生の指導や成長に寄与、特に、テニスに長じていらっしゃった思い出があります。高齢になっても結構、健康で明瞭な頭脳と判断力を見せる姿は、特に、月一回、行われる「教区関係の逝去者記念式」礼拝後、詳しく故人の紹介をしていてくださっていた事でもよく知られています。

先生は地道に教育の世界に献身されました。この功績に思いを馳せ、教育の世界に献身する人材が育つように、切に祈ります。